

[成果情報名]「結びの神」安定生産のための栽培マニュアル

[要約]「結びの神」を安定生産するための栽培条件・肥培管理を明らかにし、栽培技術マニュアルを作成した。

[キーワード]「結びの神」、「三重 23 号」、安定生産、マニュアル、人と自然にやさしいみえの安心食材表示制度、収量、玄米蛋白質含量、農産物検査

[担当]三重県農業研究所 農産研究課、伊賀農業研究室

[分類]普及

[背景・ねらい]

水稻新品種「三重 23 号」は、「人と自然にやさしいみえの安心食材表示制度」の下で生産され、収穫物の玄米蛋白質含率が 6.8%（水分 15%換算値）以下、かつ農産物検査で 1 等格付けされたものを「結びの神」として有利販売している。しかし、前述の 3 条件を満たし、安定した収量を確保できる栽培技術は確立されていない。そこで、「結びの神」の安定生産のための栽培技術マニュアルを作成する。

[成果の内容・特徴]

1. 「結びの神」の栽培マニュアルを作成した（図 1）。
2. 適する移植時期は、4 月下旬～5 月上旬である（図 2）。4 月下旬～5 月上旬までの範囲では、移植時期を変えても安定した収量・品質を得ることができる。5 月中旬以降の移植では、穂数が減少し収量が低下する。
3. 窒素施肥量は、基肥 5kg/10a と穂肥 2+2kg/10a（出穂 20 日前と 10 日前に施用）の合計 9kg/10a が適する（図 3）。
4. 基肥窒素量を 3kg/10a とした場合は、穂数の減少によりやや収量が低下する。また、基肥窒素量を 7kg/10a、または穂肥窒素量を 3+3kg/10a とした場合、玄米蛋白質含有率が高くなり、基準値である 6.8%を上回る場合がある（図 3）。
5. 収穫適期は、籾水分 28～26%、出穂後積算平均気温 880～1000℃、出穂後 32 日～36 日である（図 4、図 5）。籾水分 28%以下（出穂後の積算平均気温 880℃以上）では、屑米が少なくなり千粒重が安定する。籾水分 26%以下（出穂後の積算平均気温 1000℃以上）では、胴割粒発生率が高くなる。また、収穫適期における黄化籾率は 39～88%と「コシヒカリ」に比べ低く、籾に青みが残りやすいため、刈遅れによる胴割粒発生に注意する。

[成果の活用面・留意点]

1. 本マニュアルは生産者向けである。
2. 本試験結果は、三重県農業研究所（松阪市）および伊賀農業研究室（伊賀市）内の水稻生育に適正な土壌条件における圃場で行われたものである。
3. 移植時期についての試験（図 2）は、基肥窒素量 5kg/10a、穂肥窒素量 2+2kg/10a および栽植密度 60 株/坪の条件で行われた結果である。
4. 基肥および穂肥施肥量についての試験（図 3）は、4 月下旬移植および栽植密度 60 株/坪の条件で行われた結果である。
5. 収穫適期についての試験（図 4、図 5）は、4 月下旬移植、栽植密度 60 株/坪、基肥窒素量 5kg/10a および穂肥窒素量 2+2kg/10a の条件で行われた結果である。

[具体的データ]

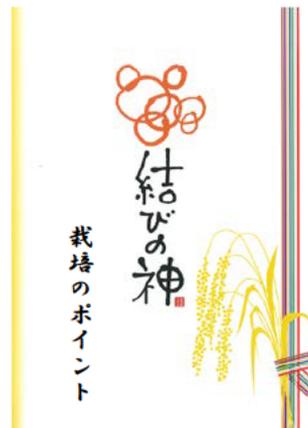


図1 栽培マニュアル（表紙）

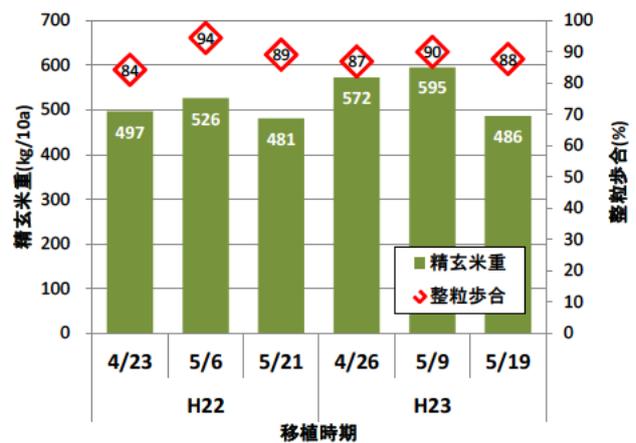


図2 移植時期と収量・整粒歩合の関係 (H22年、H23年：松阪市)

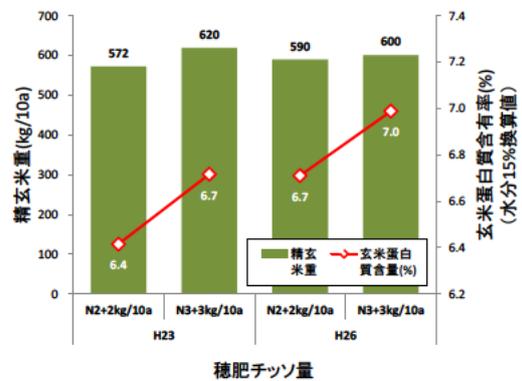
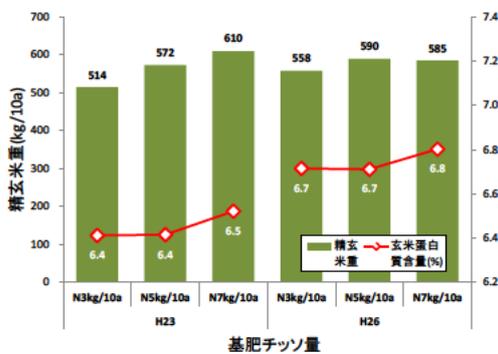


図3 基肥・穂肥窒素施用量と収量・玄米蛋白質含有率との関係(H23年、H26年：松阪市)

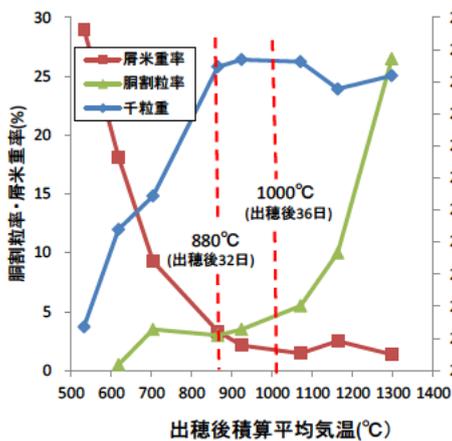


図4 出穂後積算平均気温と屑米・胴割粒・千粒重の関係(H25年：松阪市)

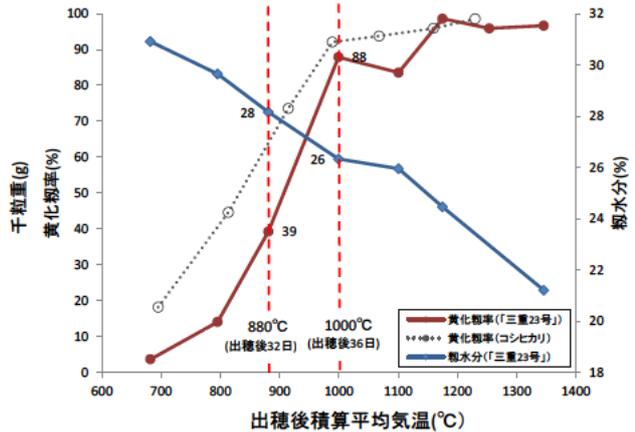


図5 出穂後積算平均気温と黄化籾率・籾水分の関係(H25年：伊賀市)

(大西順平)

研究課題名：「結びの神」生産のための栽培技術の開発

予算区分：執行委任（新技術導入広域支援事業） 研究期間：平成22～26年度

研究担当者：大西順平、田畑茂樹、山川智大、中山幸則、松本憲悟、瀬田聡美、小坂雅一、別所大輔、宮本義彦、納米宏樹、加藤美穂、中林義博、北川強司、北上達